

七行本の創始時期

—その他、近松・筑後掾時代の新出資料について—

神 津 武 男

はじめに

新作の浄瑠璃本が、前代以来の板式である八行（一頁あたりの行数）ではなく、義太夫節独自の七行をもつて初板されるようになる時期および経過に関しては、大きく二つの説が提出されている。

七行本創始に関わった板元を、誰とみるか。竹本筑後掾（初世義太夫）と結んだ「正統」〔岩波書店「近松全集」の表現〕的な板元・山本（九兵衛・九右衛門）であるとする説と、海賊板の板元たちが早かったとする説とが対立している。現在では、山本先行説が通説となっている。

海賊板の板元らの先行を説く立場に、筆者はかつて賛意を示した^{〔1〕}。近時、この説を補強する資料を得たので、当該資料を踏まえながら、本稿において再説する。

あわせて、近松門左衛門・竹本筑後掾に関係するいくつかの新出本について、紹介することにした。

一、七行本のはじまり

ながく絵入本が主流であった浄瑠璃本の歴史の上に、絵を捨てて、本文と節章のみから成る大字本を作り出したことよって、浄瑠璃本ははじめて近世化したといえるであろう。宇治加賀掾の、延宝七年（二六七九）『平若千人切』八行本が、この形式の最初例と考えられている。竹本筑後掾も流派創始の当初には、加賀掾以来の八行本を採用していた。

従来、七行本のはじまりは、宝永七年（二七一〇）初演『吉野都女楠』とされてきた。それは、『外題年鑑 宝暦板』の序文に、

宝永七庚寅の年、竹本筑後掾語られし『吉野都女楠』の時よりも、大字七行と成し始^{なりはじ}

とあることに基づく。

しかし現在では、『吉野都女楠』山本板（七行本と八行本とが残る）では、八行本の発刊が先行したと考えられ、以後、「最初の七行本は何か」が問題とされてきた。

この問題に関わる先行研究には、次の五編を数える。

- ① 祐田善雄氏「近松浄瑠璃七行本の研究」^{〔2〕}（一九六一年）
- ② 鶴見 誠氏「浄瑠璃七行本創刊に関する私見」^{〔3〕}（一九八一年）
- ③ 大橋正叔氏「当て込みと上演年時の決定」^{〔4〕}（一九八七年）
- ④ 山根為雄氏「『吉野都女楠』をめぐる」^{〔5〕}（一九八八年）
- ⑤ 諏訪春雄氏「近松正本についての覚書」^{〔6〕}（一九九〇年）

当該課題が幾度も取り上げられたのは、「七行本」が義太夫節独自の形式であることの重要性を認めてのことであろう。

板式「七行」を採用した最初の本屋は誰か。①の山本説と、②の他店説との二説が対立する。現在、③④に支持された、①の山本先行説が優勢である。

①の祐田氏は、

重板類板を追放するのみならず、遠大な考えを実現するために新しい形式の七行本を開板した。（中略）この英断以来山本板は一目で判別がついたから、山本は七行本の重板類板をしなくなったが、七行本開板の真の意図はそうした狙いよりはむしろ山本が竹本座浄瑠璃本の出版権を独占するための下準備だったとして、山本の先行を説いた。

一方、②の鶴見氏は、宝永五年（二七〇八）三月の京都大火での山本九兵衛の罹災や、大坂の本屋・正本屋仁兵衛板の七行本が現存することを根拠として、

大坂において、かなり七行本が出廻っていたことになろう。（中略）竹本座上演の浄瑠璃について出版権を持つ山本九兵衛としては、多年憤懣やる方ない気持を抱いていたのであった。そこで此度大坂において七行本を刊行し、その刊行に当たっては、「七行大字直之正本とあざむく類板世に有といへ共……」という奥書を付けて、流布の諸本の誤り多い旨指摘し、俾山本九右衛門の新しい出版事業として、

その行を盛んにしたのであった。

と、他店板の七行本流行に追隨する形で、山本が新規事業の一つとして、板式「七行」を採用したという可能性を説いた。筆者は②の鶴見説を支持するものである。

72頁に掲げた表2「義太夫節大字本の偽板一覽」を御覽いただきたい。祐田氏は、山本が七行本を採用したのち、七行本の重板類板が止んだと説かれるが、むしろ偽板としての七行本は、祐田氏の説く七行本採用（宝永七年「吉野都女楠」）以後に盛んに行われている。祐田説では、この点の説明が付かないのではないだろうか。

また偽板の八行本は、正徳二年『夕霧阿波鳴渡』以後には行われないようである。偽板の形式はこのころ、八行本から七行本へと移行したというべきであろう。問題を、山本板の七行本への移行が、偽板のこの動向とどう関わるか、という一点で捉え直すべきである。

山本が七行本を刊行し始めた時、浄瑠璃本に付した奥付は、66頁の写真である。ここでは、②の鶴見氏も指摘されたように、「七行大字直之正本とあざむく類板世に有」云々と、すでに世間には偽板の七行本が行われていたことを、板元である山本、あるいは識語を記した筑後掾自身が述べている。祐田説およびその支持説においては、この点が軽視されているように思われる。

もうひとつ、偽板七行本の流行を証言した資料に、正徳元年（一七一）刊『鵜鴒ヶ枕』の筑後掾の序文がある。筑後掾は、

重板・類板まち／＼にて、或は、七行に書かへ、予にことほりもなく、奥書名乗をにせて、直本・正本といつはり、世を欺き

と述べて、「七行に書かへ」た、重板・類板が出回っていると憤る。

『鵜鴒ヶ枕』刊行以前に、山本がすでに板式を「八行」から「七行」に改めていたならば、筑後掾は「七行に書かへ」られた、とは言わないだろう。正徳元年の時点ではまだ、筑後掾は自身の通し本の板式を「八行」と定めていたと考えねばならない。

なお現在、『鵜鴒ヶ枕』所収の、『鎌田兵衛名所盃』『屏風八景』三丁が七行であることを根拠として、同書を山本板七行本成立の初例とする説が一般的である。しかし近時、『鵜鴒ヶ枕』諸本に二種あることを確認し、従来初板とみられていた本が改修板であることを知った。次節に詳述する。

二、『鵜鴒ヶ枕』の諸本

『鵜鴒ヶ枕』は正徳元年七月刊、三冊から成る道行揃である。下巻に近松の跋文を備えることから、岩波書店『近松全集』にも収録されるなど、ひろく知られた資料であるが、当該資料に異板箇所のあることは知られてこなかった。

次頁の表1「『鵜鴒ヶ枕』所在一覽」は、当該資料の所在を大きく奥付の異同によつ

て配列し、示したものである。1～6の奥付はA、7～11の奥付はB、である。

【奥付A】

右数条之篇々節頌句等雖具於前板而今也再令琢磨校正而欲令愚門人勸稽古之微意在焉而已

正徳元辛卯年

七月吉日

竹本筑後掾

大坂高麗橋壺町目 正本屋山本九兵衛板
山本九右衛門板

【奥付B】

右之本令吟覽頌句首節墨譜等不殘毫厘令加筆候可有開版者也

竹本筑後掾

重而予以著述之本令校合候畢全可為正本者歟

近松門左衛門

大坂高麗橋壺町目 正本屋山本九兵衛板
山本九右衛門板

表1に示すように、奥付Aのグループに三冊揃ったものが無かったことが、この点を見えにくくしてきたかと思われるが、奥付Aの上巻冒頭の標題は「名所屏風の四季」とあつて八行三丁（丁付「名所盃二十五」四季一・「名所盃二十六」四季二・「名所盃二十七」四季三、奥付Bのそれは「屏風八景」とあつて七行三丁（丁付「屏風八景一」「屏風八景二」「屏風八景三」）から成り、奥付の異同と、上巻冒頭の板の異同とは連動している。問題となるのは、奥付Bの「屏風八景」は目録と異なり『鎌田兵衛名所盃』のものではなく、享保四年（一七一九）豊竹座初演『義経新高館』の本文である点である。

『鎌田兵衛名所盃』『名所屏風の四季』は、下之巻・長田館で、長田庄司の計略により招き入れられた源義朝が、広縁に引き回された屏風を見、のち湯殿に向かうという場面である。

一方の『義経新高館』『屏風八景』は、三ノ切・高館（義経の居館）で、義経が和泉三郎の妻・花巻へ屏風を下賜すると、花巻は義経の妻・京の君に案内を請うという場面。「名所屏風の四季」冒頭の「よしとはちより是を見給へば。国々にきこへたる。

名所くのうら山を。四季によそへてうつさるゝ。」を省いて、「まずひがしのびやうぶには。」と始まるのが「屏風八景」の特徴である。途中、「のこるかたなき筆の跡。」までは、両者ともにほぼ同文である。

「名所屏風の四季」の末尾は、

くりかへし御らんじて。君はなをしも心とけかけ宗あないし奉れば。金王丸を御供にて。くすりの湯殿に入給ふ御有。さまこそあやうけれ

と、義朝が死地に向かう緊迫した本文であるが、「屏風八景」では、

よくくおほへ候へと。おしへ給へばふうふのいよく。よろこびけうじけると結ばれ、長閑な場面となっている。

最大の相違は、屏風を読み解く人物が、前者は男性（義朝）、後者は女性（京の君）となる点で、末尾の書き換えがこの特徴をよく示している。

享保四年初演『義経新高館』の「屏風八景」を含む限りは、『鸚鵡ヶ杣』奥付Bのグループの刊行時期は、正徳元年ではなく、享保四年以後と考えなければならぬ。このことから『鸚鵡ヶ杣』の初板を、目録通りに「鎌田兵衛名所盆」「名所屏風の四季」を冒頭に据え、上巻筑後掾序文の年記「正徳元年辛卯年初秋吉日」と同じく、奥付にも「正徳元年辛卯年七月吉日」と掲げた、奥付Aのグループであると筆者は考える。

摺の前後も、奥付B本に生じた欠損は、奥付Aにはない。この点からもやはりAが早く、Bが遅いと判断できる。

正徳元年の初板時、『鸚鵡ヶ杣』は七行の丁を含まなかった。この点は、前節に引用した筑後掾序文が偽板七行本の存在を糾弾したのと照応して、筑後掾はやはり自身の浄瑠璃本の板式を八行と定めていたことを証明するものと考えられる。

表1 『鸚鵡ヶ杣』所在一覧

	所蔵機関	上巻	中巻	下巻	奥付
1	大阪音楽大学	○			A
2	演劇博物館（辻町文庫）			○	A
3	演劇博物館		○		A
4	東洋文庫				A
5	文楽協会	○			無
6	鈴木光保氏		○		A
7	演劇博物館	○			B
8	松竹大谷図書館	○			B
9	東京大学駒場図書館	○	○		B
10	東京都立中央図書館	○		○	無
11	文楽協会			○	B

②の鶴見氏は、七行本のはじまりを、山本板としては正徳四年（一七一四）正月初演『天神記』

以後、山本板以外ではその以前から、と区別して見ることを提唱された。ここに鶴見氏の発見

があったのであるが、この点はあまり注目されてこなかった。前記の非・山本板七行本の残存

状況、および『鸚鵡ヶ杣』筑後掾序文、そして66頁の山本板奥付識語を総合して考えるならば、山本板に先行して七行本が行わ

れていたとする鶴見説を支持せざるを得ない。

いずれがその初例であるか。明確な答えを持たないが、『外題年鑑 宝暦板』の伝える、宝永七年「吉野都女楠」がひとつの目安となるものと考えている。

72頁の表2に示すように、享保四年（一七一九）二月初演『本朝三國志』以後に、非・山本板の七行本は確認されなかった。通覧して判ることは、非・山本板の七行本は正徳年間を中心として、宝永七年から享保四年までの時期に限られるらしいことである。また「山椒太夫葎原雀」以外は、すべて竹本座初演作品であることが注目される。これは偽板七行本の問題が、竹本座（筑後掾や、板元山本）が直面した課題であったことを示している。

なお宝永七年以前初演の二作品について触れておく。表のNo.2「せみ丸」は、豊竹上野少掾時代（正徳五年／享保十六年）の豊竹座再演時の、重板である。

No.1「天智天皇」には、再演記録は残らない。しかし『天智天皇』山本板七行本は、正徳五年（一七一五）九月「豊年秋の田」へ板木を流用されるので、七行本の開板はその以前である。初演時には八行本が初板されているので、同七行本は、山本の板式「七行」採用ののちに、山本自身によって再板されたものと考えられる。

④の山根氏は、『天智天皇』七行本について、包紙に「七くだりけいこ本此度新二令板行也」とあることに基づき、

恐らく八行本を七行に改刻して刊行した早期のものと推定しておられる。

かつて八行本で初板された作品のすべてが、七行本として再板されたのではないことと考える合わせれば、再板の契機として再演興行を想定することは、自然であろうと思われる。『天智天皇』再演の時期を筆者は、正徳三年「穰静胎内拵」（山本が七行本を板式に採用した）以後、正徳五年九月「豊年秋の田」（への板木流用）以前の時点、と推考している。

元禄初演の右の二作を除けば、非・山本板七行本は、宝永七年に始まるもの、と考えられる。次に山本板における七行本の最初例を考えてみたい。

三、山本板における七行本のはじまり

山本板における七行本の初例は、なにか。通説の『鸚鵡ヶ杣』改修本は当たらないとしても、鶴見説の正徳四年『天神記』では遅いように思われる。結論から述べると、筆者は正徳三年（一七一三）と考えている。

②鶴見氏が正徳四年『天神記』とされたのに対し、③の山根氏は、「現在のところ八行本の存在を聞かない」ことなどを根拠として、正徳二年（一七二二）三月初演『けいせい掛物揃』を、七行本で初板されたと判断された。山本板における七行本の初例は、

山根氏指摘のごとく、『けいせい掛物揃』とみるべきであろう。非・山本板における板式「七行」採用に遅れること、二年後の出来事である。

ただし続いて竹本座で初演された、正徳二年九月以前『囃山姥』と、同年秋『長町女腹切』を、山本はともに八行本で初板している。そのため、『けいせい掛物揃』七行本は山本板の最初例ではあるが、あくまで試験運轉的な性格のものであった、と筆者は考える。前年『鸚鵡ヶ袖』での、筑後掾の非難（七行に書かへ）云々をみれば、必ずしも新しい板式に好意的でない筑後掾を説得する期間であつたと解釈できるのかもしれない。

では、山本板で以後、継続的に七行本で初板していくこととなる最初例は、何か。筆者のみるところ、正徳三年閏五月初演『礫静胎内拵』が、最初である。

鶴見氏は山本板の「新刊大字七行本の最初の体裁」に関して、

奥書は例の「七行大字直之正本とあざむく……」とある奥書で、『近松浄瑠璃本奥書集覧』（『正本近松全集』別巻二）掲載の奥書（九一一—A）であつた。

と述べられた。

『近松浄瑠璃本奥書集覧』（『正本近松全集』別巻二、勉誠社、一九八〇年。以下『集覧』と略す）の、番号（九一一—）類は、かつて『近松浄瑠璃本奥書集成』（中之島図書館一九六〇年）で、番号「四十」として整理した奥付文面を、板木の異同によって、AからDの四つに細分化したものである。

いま、岩波書店『近松全集』によってみると、

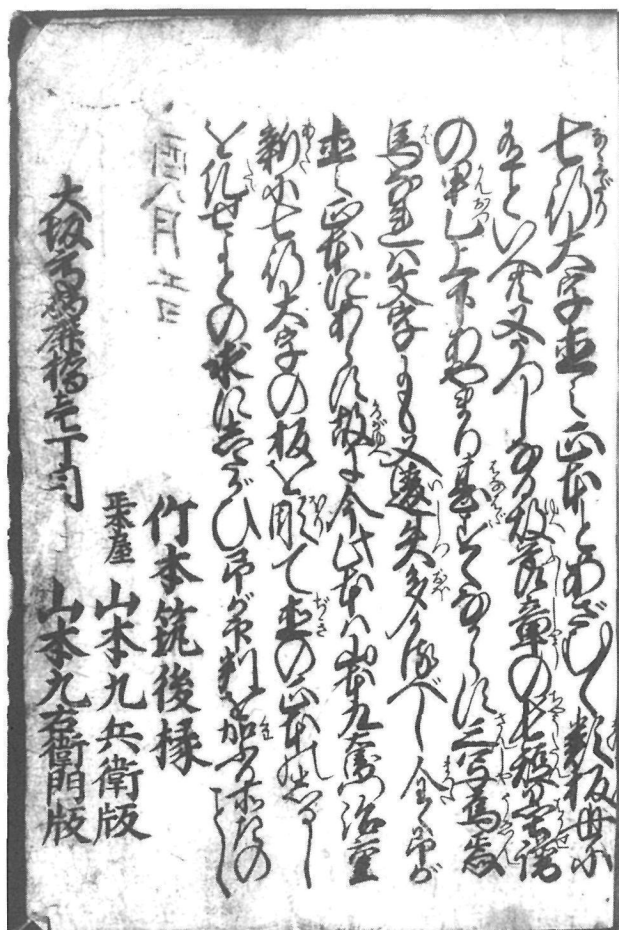
正徳三年（一七一三）閏五月初演『礫静胎内拵』以降 『集覧』（九一一—A）
正徳五年（一七一五）五月初演『生玉心中』以降 『集覧』（九一一—C）
享保二年（一七一七）二月初演『国性爺後日合戦』以降 『集覧』（九一一—D）
享保三年（一七一八）七月初演『曾我会稽山』以降 『集覧』（九一一—B）

の奥付が、順に用いられたことが判る。

筆者がここに取上げたいのは、『集覧』に載らなかつた、もう一枚の（九一一—）類の存在である。下に掲げた【写真1】は、正徳三年閏五月初演『礫静胎内拵』七行本（京都大学附属図書館。請求番号「4-83-484(3197)」）の奥付である。岩波書店『近松全集』では第九巻所収の、正徳四年九月以前初演『嵯峨天皇甘露雨』七行本（大東急記念文庫）奥付を参照されたい。ほかに、同板の奥付としては正徳四年九月以前『娥歌かるた』七行本（東京都立中央図書館）を確認している。

問題は、新出（九一一—）類の奥付の使用時期である。同類AからDが、右の順に整然と並んでいるところを見ると、新出板がいずれかの間に用いられたとは考え難い。もちろん、一軒の板元において、ある時期に用いられた奥付が一板に限られるのか、という点については、いままのお定説をみるに至らないが、岩波書店『近松全集』の判

【写真1】 正徳三年閏五月『礫静胎内拵』七行本（京都大学附属図書館）の奥付



断に従うならば、複数板の奥付が同時並行的に用いられてはいない、と考えるのが妥当であるように思われる。

正徳三年閏五月初演『礫静胎内拵』七行本には、新出板（京都大学）と（九一一—A）（東京大学教養学部・中之島図書館・早稲田大学）をもつ本とが残り、翌年正月初演『天神記』七行本には、新出板奥付をもつ本はなく、A（東京芸術大学ほか）のみが残る。この場合、新出板の使用時期を前年正徳三年、Aの使用時期を翌四年正月以降と考えることができればよい。

いささか状況証拠による推論を重ね過ぎるかは思うが、前代の奥付形式の用いられた正徳二年秋『長町女腹切』と、『集覧』（九一一—A）の用い始められる正徳四年正月『天神記』との間の、三年閏五月『礫静胎内拵』を中心とする時期に用いられた奥付は、（九一一—）類の新出板であろうと推定する。この点からさらに進んで、初演年月の明確でない『娥歌かるた』『嵯峨天皇甘露雨』二作の初演年を、同板の奥付を有するという書誌的特徴に基づき、『礫静胎内拵』に前後する時期（正徳三年）とまで推定し得ぬか、と筆者は考えるのである。ただしこの点は、伝本調査を重ねて、新出板をもつ本をより多く確認した上で、再考したい。

ここで、七行本創始に関して、まとめておきたい。

・七行本を最初に刊行したのは、正規の板元である山本九右衛門ではなく、不正な板元であったこと。

・七行本の始まりを『吉野都女楠』とする『外題年鑑』を、否定すべき積極的根拠はないこと。

・山本板の七行本は、正徳二年（一七二二）三月『けいせい掛物揃』を、初例とすること。

以上の三点は先行研究に説かれていた点である。次の二点が、筆者の私見である。

・山本が継続的に七行本で初板し続けるようになるのは、正徳三年閏五月『穰静胎内括』以後であること。

・山本が七行本初板を規定路線化した際に用いた奥付は、文面は鶴見氏指摘の集覧（九一—一—A）に同じであるが、板木の異なる新出板である、と考えられること。

なお以上の事例は、竹本座（板元・山本九右衛門）の事例によってみたものである。最後に豊竹座の事例について、触れておく。

正徳三年十月初演『傾城三度笠』は八行本（松竹大谷図書館）、続く正徳四年五月以前『小野小町都年玉』（中之島図書館）、同年七月『曾我姿富士』（松竹大谷図書館）が七行本であることをみれば、豊竹座（板元・西沢九左衛門）の方も、竹本座（山本）に後続する形で、七行本を採用したことが判る。

義太夫節浄瑠璃本独自の板式「七行」は、不正の板元らの創案にかかり、はやく宝永七年には行なわれ、正徳二、三年に竹本座、正徳四年に豊竹座の、各正規の板元の採用するところとなったと考えるのである。

四、『音曲百枚笹』の諸本

山本板における七行本採用が正徳三年であったならば、以後の作品について八行本を初板と見做すべき根拠はないのではなからうか。筆者がこの疑問を抱くのは、正徳四年九月以後上演とされる『音曲百枚笹』についてである。同作は、正徳四年九月十日に没した筑後掾の、その語り物の題名を綴り合わせた追善浄瑠璃である。

『音曲百枚笹』には、

I 七行二十四丁本・山本板（大阪大学）

II 七行二十五丁本・正本屋仁兵衛板（東京大学教養学部・中之島図書館）

III 八行九丁本・山木板（東京都立中央図書館）

の三板四点が残る。

岩波書店『近松全集』も、勉誠社『正本近松全集』も、Ⅲを初板とみて、底本に採用した。しかし旧説でいえば宝永七年、通説の正徳元年の、山本の七行本採用以後の

初板を、八行本と考える根拠は、乏しいのではないか。

I の阪大本の奥付は、前後の時期、正徳四年正月『天神記』から、翌五年春『大経師昔暦』までの初板本に付された奥付（『集覧』（九一—一—A）と、同板である。『音曲百枚笹』の初板は、I とみるのが自然であろう。

Ⅲの奥付（『集覧』（二五—七））は、管見の限りであるが、次の十二点に確認された。

元禄十年七月以前 『自然居士』八行本（中之島図書館）

宝永三年四月以前 『本領曾我』八行本（国会図書館・東京芸術大学）

宝永四年末 『丹波与作待夜のこむろぶし』八行本（早稲田大学）

宝永七年四月 『大掛物十幅一対』八行本（中之島図書館）

宝永七年以前 『兼好法師物見車』八行本（文楽協会）

正徳元年以前 『鎌田兵衛名所益』八行本（天理図書館）

正徳元年以前 『源義経将某経』八行本（天理図書館）

正徳四年九月以前 『弘徽殿鸛羽産家』十一行本（同志社大学）

正徳四年顔見世 『桧狩剣本地』十行本（関西大学）

正徳五年十一月 『国性爺合戦』十行本（玉川大学）

享保四年十一月 『本朝三国志』十一行本（関西大学）

その使用状況は大字八行本のほか、中字十行、十一行本にも用いられ、初演年代には二十年余の幅があるため、使用時期を絞り込み難い。

正徳三年以後の山本による七行本初板に、『集覧』（九一—一—）類が用いられたことは前節に述べたとおりであるが、同時期の中字本には前代の形式である『集覧』（二五—）類が引き続き用いられたようである（享保三年二月『日本振袖始』十二行本（東京大学総合図書館）参照）。このことからⅢの奥付（『集覧』（二五—七））をもつ『音曲百枚笹』八行本は、大字七行本に対する、中字本として刊行されたものでなかったかと筆者は考えるのである。正徳五年春『大経師昔暦』の八行本（大阪大学・静嘉堂文庫・東京大学駒場図書館）も、同様の例と考える。

なおⅢの奥付について、鳥居フミ子氏は、山本の「本」第五画が途切れていることなどを指摘して、「山本版と断定せざるを得ない」とされた（『正本近松全集』第十五巻「音曲百枚笹」解題）。今は鳥居説に従い、山木板と読んでおきたい。

また『音曲百枚笹』の初板を、八行本でなく、七行本と判定したことでは生じる変更点に触れておく。八行本にはなく、七行本二種には添えられた『最明寺殿百人上臈』下之巻「女鉢の木 最明寺殿道行」の一幕の存在である。筑後掾追善興行時（建ての演目不明）、「遣由」「外題づくし」二曲に加えて、「女鉢の木」が付け物として記念上演されたものと考えられる。

「女鉢の木」をもつ『音曲百枚笹』七行本二種について、『正本近松全集』は享保十一年（一七二六）四月『北条時頼記』五段目「女鉢の木」の流行にあわせた後摺本と推定しているが、これはIの奥付の使用状況からみて考え難い。『最明寺殿道行』八行単行本（東京大学文学部国語研究室など）も残ることから、元禄十二年（一六九九）の初演時に相応の当りをとっていたものと推定する。筑後掾生前の当り作のひとつとして、追善興行の付け物に選ばれたものであろう。

五、筑後掾生前の新出資料

前節までは、七行本が浄瑠璃本の板式として定着する過程について、『鸚鵡ヶ袖』『音曲百枚笹』の初板認定を考証の中心として、概説した。以下には、従来注目されることのなかった、筑後掾生前の資料五点について、簡略ながら紹介しておきたい。

（一）元禄はじめカ『恵方大黒天』

『恵方大黒天』は松竹大谷図書館所蔵、八行五十五丁本（請求番号「7684-235（82886）」）。奥付欠。替表紙・打ち付け。当該書は一九九五年夏、松竹大谷図書館で並木正三追善浄瑠璃『極楽往来蓮寄初』などとともに未整理本として確認、新たに整理登録されたものである。

加賀掾・天和四年（一六八四）正月「甲子祭」を、改作したもので、四段目までは同文。第五以下が異なり、『甲子祭』では八丁で「懐胎十月」の節事——のちに元禄六年（一八九三）二月以前「蟬丸」五段目に襲用される——を含むが、『恵方大黒天』はこれを略し、あらたに「義平夫婦寺社めぐり」で結びとして、四丁にまとめる。当該四丁のみ、句点が行末に付されるなど、義太夫節の特徴を示す。

こうした板木利用のあり方（大半を加賀掾から流用し、改訂部分のみ新板し加える）は、元禄四年（一六九一）に、加賀掾「女人即身成仏記」を筑後掾『大覚大僧正御伝記』と改めた例があるので、これに近い頃の改作と考え、元禄はじめと推定した。

なお原作『甲子祭』はこれまで写本（東京芸術大学）一点のみの存在が知られていたが、大半部分（五十二丁分）について、板本が新出したことになる。当該写本を、『恵方大黒天』と比較するに、精密な写しであったことが判った。

参考のため、義太夫改作部分のみ翻刻した（71頁に掲載）。

（二）元禄三・四年ごろ『本朝用文章』

関西大学図書館所蔵、八行本（中村幸彦文庫8000）。書題簽・原表紙。奥付は『集覧』〔八〕。『京二条通寺町西入町北側・大坂高麗橋筋か』と出見世。山本九兵衛板。この奥付は元禄三年（一六九〇）八月ごろ『大原問答』八行本（中之島図書館・早稲田大学）

元禄四年「大覚大僧正御伝記」八行本（早稲田大学）と同板であるので、これらに近いころの上演と推定する。

岩波書店『近松全集』編纂時、当該作の板本の存在が知られておらず、やむなく藤井乙男氏校訂『近松全集』（第三巻、大阪朝日新聞社、一九二五年）の活字本に基づき、収録したものである。

当該書を含む中村文庫全体は、一九九八年七月に関西大学図書館へ収蔵されたとのことで、その経過などは、同館ホームページの、「中村幸彦文庫」の紹介（<http://www.kansai-u.ac.jp/Library/news/nakamura.html>）に詳しい。印刷物としての目録はまだなく、同記事中の「和漢籍のリスト」で、分類によつて検索できる。筆者も同記事により「浄瑠璃本」を検索し、所蔵を知り、二〇〇五年、二度にわたつて閲覧、調査させていただいた。

なお中村文庫本が、朝日新聞社『近松全集』の底本と同一であるのかは残された写真からだけでは判断できない。ただし奥付の印が、中村文庫本では多少かすれているので、別本と考えておきたい。

（三）元禄十六年『曾根崎心中』

黒部市立図書館所蔵、八行二十五丁本（川端家文庫K1003）。無題簽・原表紙。奥付は集覧（一三一六）。〔京〕山本九兵衛板・大坂高麗橋巷丁目山本九右衛門板。この奥付は元禄十六年（一七〇三）八月刊『曾根崎心中』六行本（甲南女子大学・神戸女子大学）と同板であるので、同年中の刊行と推定する。

『曾根崎心中』八行本（山本板）には、二十五丁本と二十六丁本の二種があり、二十五丁本が初板、二十六丁本はその改訂板である。二十六丁本には山本板の奥付をもつ本（明治大学図書館江戸文芸文庫）があり、また二十五丁本の板木を利用していることから、二十五丁本もまた山本板と推定されていた（山根為雄氏『曾根崎心中』の正本について）。

しかし唯一知られていた二十五丁本（中之島図書館）は、奥付を欠き、また十九丁を破損するため、山本板の明証はなく、かつ「天満屋」の段切、「道行」の冒頭本文を欠いている。そのため、岩波書店『近松全集』では二十六丁本から破損箇所を補うという処理を施していた。

黒部市立図書館本は、二十五丁本の完本の新出であり、その奥付（『集覧』（一三一六）から山本板との確証を得ることができる。また当該本の出現によつてはじめて、『曾根崎心中』を初板（未改訂本）で読み通すことが可能となった。参考のため、十九丁の写真を70頁に掲げる。

岩波書店『近松全集』の補訂部分と較べると、次の三箇所を表記のみ小異があったことを報告しておく。

該当頁行 岩波翻刻

黒部本

7頁6行 かうとくし〔。〕

かうとくし。

9頁2行 かた〔ぶ〕きぬ

かたふきぬ

9頁5行 〔。卅ばんに。〕

。三十ばんに。

(四) 元禄十六年ごろ刊・逸題道行揃

南山大学図書館所蔵、八・十・十一・十二行本 (882頁)。書題簽・原表紙。奥付は『集覧』(「二八」)。「大坂北久ほうじ町御堂筋西かわ本屋仁兵衛」板。本来の書名が不明のため、南山大学図書館では購入時の古書目録に記された、「義太夫節段物集」を仮の書名としている。所収曲については、74頁の表3「南山大学図書館・逸題道行揃所収曲一覧」を参照されたい。「目録」欄には、目録の標題、「内題」欄には、各所収曲それぞれの標題を、原本の配列のとおりに書き出した。

元来二冊であったものを一冊にまとめたものであるらしく、前半十五曲、後半十五曲のそれぞれ冒頭に一丁ずつ目録を備える。筆者のこれまでの調査では、正本屋仁兵衛板の道行揃には、横本十一行本の例をいくつか知る。しかし管見にして、仁兵衛板の二冊本で、半紙本道行揃の存在を知らない。大方の御教示を賜りたい。

ここで注目されるのは、巻末に添えられた「曾根崎心中の道行 徳兵衛・おはつ」三丁で、これは目録に記載がない。そのため、当該三丁が元来この道行揃に付属したものであったか、あるいは改装者の手により、あとで添えられたものであるかは判断できない(改装のため綴じがきつく、下綴じの様子をみるできない)。

いずれの可能性もあり得るが、いまは仮に元禄十六年ごろ、「曾根崎心中」大当たりの余勢を駆って、以前に編成した道行揃に、「曾根崎心中」道行を添えて再度刊行したものと考えておきたい。

(五) 宝永元年『雁金文七三年忌』

慶応義塾図書館所蔵、十行二十二丁本 (617頁)。奥付欠。替表紙・打ち付け。内題に「かりがねぶんしちさんねんき」と振り仮名がある。内題下に「正本」。

当該本は、幸田成友氏著『読史余録』(大岡山書店、一九二八年)に初丁表の写真が紹介されている、ながく所在不明とされてきた。

そのため、『錦文流全集』浄瑠璃篇下巻(古典文庫、一九九一年)と、『歌舞伎浄瑠璃稀本集成』上巻(八木書店、二〇〇二年)は、水谷不倒氏校訂『世話浄瑠璃大全』(精華書院、一九〇七年)の活字本に基づき、収録したものである。

慶応本は、いわゆる幸田文庫の一本(終丁裏に「幸田成友」の朱印あり)で、幸田氏の手元から慶応大学に移っていたものらしい。

同図書館『慶応義塾図書館分類目録 和漢書の部』に、『雁金文七三年忌』の書名は見当たらないが、右の請求番号によって閲覧請求できる。

二〇〇二年三月、同館の浄瑠璃本の調査に訪問した際、貴重書・準貴重書以外の和古書については、直接書庫へ入って該当書を出納させていただくことができた。書架を見回す内、『雁金文七三年忌』を見出したものであった。

まとめ

本稿では、『鸚鵡ヶ枕』『音曲百枚笹』の初板認定につき通説に疑義を唱え、あわせて義太夫本独自の板式である七行本が、大字本の形式として定着をみる過程について、鶴見氏の説を是としつつ、私見を述べた(一・二・三・四節)。

加えて、筑後掾生前の新出資料五点について、紹介した(五節)。なお『薩摩守忠度』『せみ丸』各八行初摺本については、注(11)の拙稿を参照されたい。

最後に、『義太夫年表 近世篇』第一巻(八木書店、一九七九年)に補訂を生じると思われるのは、次の五箇所となることを付記しておく。

・19頁下階・元禄十一年正月以前「本朝用文章」を、9頁下階・五月吉日「隅田川」補訂条のあとに移項。

・29頁下階に、「元禄年間」の補記を新設して、元禄はじめ『恵方大黒天』の条を記す。

・宝永元年「雁金文七三年忌」条・31頁上階2行目「正本節付から」に続く文章、「加賀掾か」〜「至当であるう。」を、「義太夫系と特定できる」とする。

・45頁下階末「鸚鵡ヶ枕」条の、見出し「〇初秋」を「〇七月」と改める。「序に」云々とある一行は、「奥書に「正徳元辛卯年七月吉日」と。」と改める。

・52頁下階「音曲百枚笹」条は、七行本によって書誌を改め、見出しの演目に「女鉢の木」を加える。

本稿をなすにあたり資料の閲覧を許されたすべての所蔵機関へ御礼申し上げます。また所蔵資料の図版掲載を許可くださいました京都大学附属図書館・黒部市立図書館、翻刻掲載を許可くださいました松竹大谷図書館・南山大学図書館へ御礼申し上げます。なお本稿は平成18年度科学研究費補助金若手研究(B)「浄瑠璃本による近世後期人形浄瑠璃史の研究」による成果の一部である。

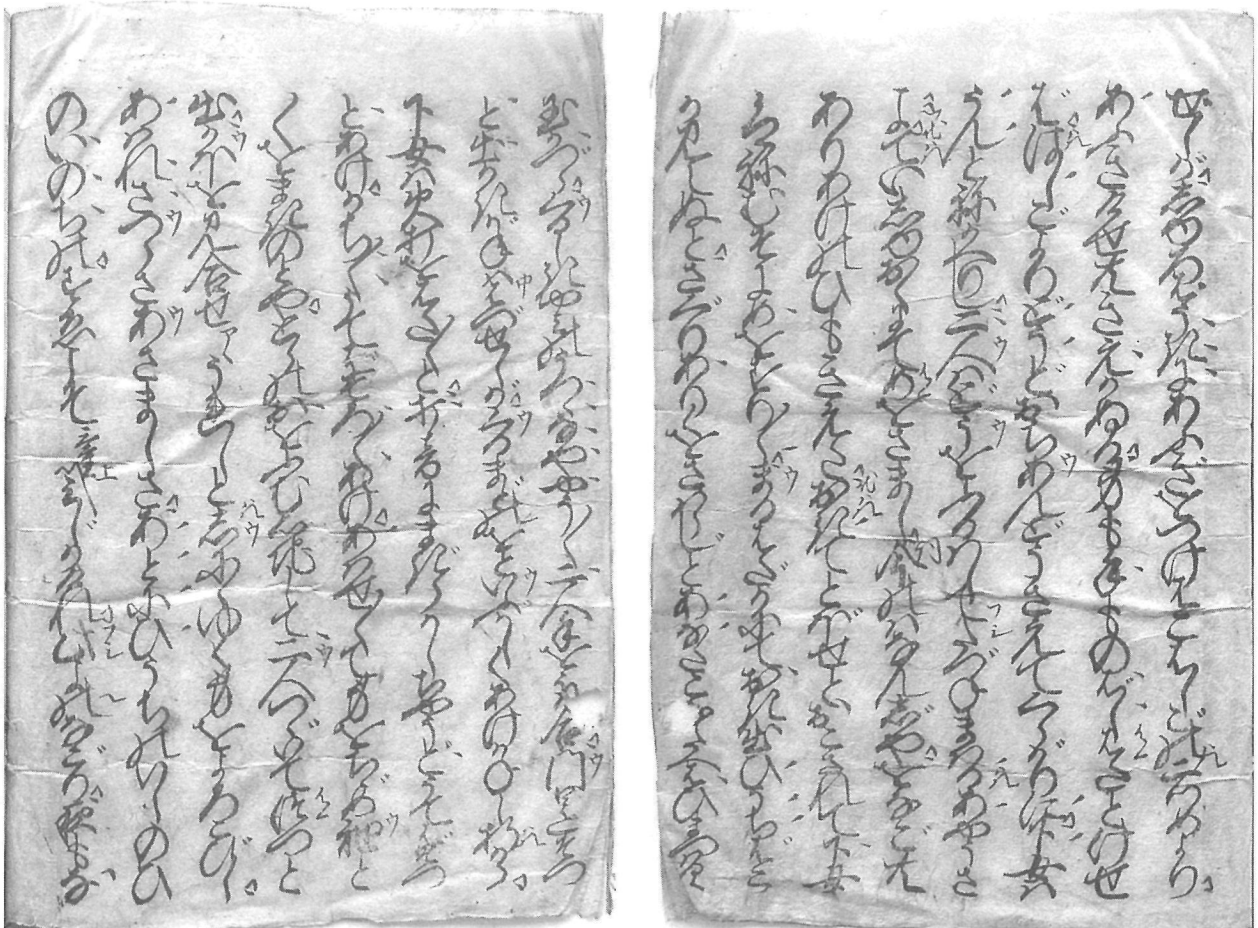
注(1)「浄瑠璃本出版」(国文学 解釈と教材の研究)「近松」特集号、学燈社、二〇〇二年五月 参照。

(2) 初出は『山辺道』第八号、天理図書館、一九六一年。祐田氏著『浄瑠璃史論考』、中

央公論社、一九七五年に再録。

- (3) 『国語と国文学』昭和五十六年十二月号、東京大学国語国文学会、一九八一年。
- (4) 『近松全集』第六卷・月報六、岩波書店、一九八七年初刷・一九九五年二刷。
- (5) 『国語国文』第五十七卷第五号——六四五号——、京都大学文学部国語学国文学研究室、一九八八年。
- (6) 『近松全集』第十二卷・月報十三、岩波書店、一九九〇年初刷・一九九六年二刷。
- (7) 鶴見氏がその例として掲げた本を、72頁の表の番号で示す。No.1(天理)、3(大倉)、15(東京芸大)、16(天理)、17(京大)、20(東大国語)、24(東京芸大)。
- (8) No.27『頼光跡目論』山本板八行本(天理図書館・早稲田大学)の奥付は、元禄十年(推定)『佐藤忠信廿日正月』八行本(天理図書館)、元禄十二年五月以前『日本西王母』八行本(演劇博物館・東京芸術大学)と同板である。その初演時期は、これらに前後する頃と見做し得るのではないか。偽板の八行本もそのころの刊と推定する。No.30『曾根崎心中十三年忌』については、十三年忌への改作以前の、元禄十六年の偽板八行本(現在未発見)に増訂したため、板式八行を引き継いだものと考ええる。
- (9) 第十七巻参照。ただし同書解題が「東京大学教養学部図書館蔵」本に拠ったとしながら、「正徳元辛卯年七月吉日」の竹本筑後掾、大坂山本九兵衛・九右衛門版の奥書がある。」とする点是不審。筆者の調査では、駒場図書館には本谷文庫の三冊本一揃いがあるのみであった。あるいはこれ以外の他本が所蔵されているのであろうか。
- (10) 『日本庶民文化史料集成』第七卷「人形浄瑠璃」(三・書房、一九八三年)には、「東京大学教養学部附属図書館」本を底本として、序・目録・跋文を翻刻する(翻刻・解題、大橋正叔氏)。同翻刻は、「万巻の書を暗じても」の「も」の欠字を指摘されている(一四九頁下階十一行目。原本「鸚鵡八」丁表七行目)。奥付Aグループでは欠けず、明確に「も」とある。
- (11) 拙稿「辻町文庫浄瑠璃関係資料調査報告(前編)——稀書を中心にみる辻町文庫の資料的価値——」(『演劇研究』第三十号、早稲田大学演劇博物館、二〇〇七年三月刊行予定所収)参照。
- (12) 仮題『貞享四年義太夫段物集』跋文で、山本九兵衛が「山本といふを山木とかすめ。」云々と批判したところの、いわゆる「山木板」の認定をめぐることは、明確に山木と表記したものに限るという立場や、『正本近松全集』に説かれる第五画の不鮮明なものを含む立場などがあるが、必ずしも意見の一致をみるに至っていない。また現在では、山木板と山木板の本文の板本が同板である事例なども報告されており、かつてのように山木板を単なる海賊板としてのみ捉えることはできなくなっている。
- (13) 廣瀬千紗子氏「並木正三不戻斬」翻刻と解題(『芸能史研究』第一五九号、芸能史研究会、二〇〇二年十月所収)に、同書について触れるところがある。
- (14) 『近松全集』第四卷(岩波書店、一九九五年二刷)所収、山根為雄氏解題参照。
- (15) 第四卷「第三門 文学・語学」昭和三十六年十二月現在、慶応義塾大学三田研究・教育情報センター、一九七七年。図書館の蔵書カードを複写して成る。

【写真2】 黒部市立図書館『曾根崎心中』十九丁



凡例

- ・底本は、松竹大谷図書館所蔵本（書誌等は68頁参照）。翻刻の許可を賜りました松竹大谷図書館へ御礼申し上げます。
- ・丁移りの箇所は本文中に「○」を施し、その中に実丁数を洋数字で示し、「オ・ウ」の略号を付した。
- ・現行の字体を用いた。
- ・仮名遣い、清濁、誤字は底本の通りとした。
- ・墨譜はすべて省略したが、文字譜はすべて採用し、本文の右側の適切と思われる位置に付した。
- ・句点は「。」で統一した。
- ・見出し「第五」「義平夫婦寺社めぐり」のほかに、原本にない改行を設けた。

第五

父子むつまじく君臣あつきは家のこえたかなりとかや。じひにと、まるよしともかうにとまる悪源太。くはんぜおんのかんおうにてをのく打つれ都路に。立かへるなみの白はたや。源氏はんじやうのはじめとこそはきこえけれ。

父よしともにたいめん有御悦びはかぎりなし。時に政清申上るは。今度ばんしうしよしや寺のくはんぜおんれいげんあらたなる御つげ。又かいぞんがしだい「々言上申（1オ）あげければ。よしともほとんどとんど御きまつ有。そつのないしに打むかひかゝるたつとき御つげにて。御身のへいさんうたがひなし礼参のためなれば。義平諸共清水寺にさんろうし。なをくゆくすああんをいのるべしとの御ぢやう也。

其時政清しやく取なをし。しからば次手に御なぐさみのため。らくぐはいの神社ぶつかく残りなく御さんけい候べし。とくくと申上ければ君をはじめ奉り。をのく尤しかるべしあらば我々も。御供申候はんとみなく。よういとへ聞へけり（1ウ）

義平夫婦寺社めぐり

かくてよし平。御夫婦は天下たいへい。こくどあんせんのためなれば。らくぐはいの寺社残りなく。おがみめぐらせ給ひける。心のうちこそ。しゆせうなれ。さて御供にはむさしばう。ひたちかいぞん召つれられ。ふりにし跡かさどぐを。めぐりくゝて。都人。きせんあゆみをはこぶ成。ぎおんのやしろふしおがみ。のりのとしびかけきよき。清水寺にまいりつ。なむや大ひくはんぜおん。そのかみ田村将ぐんもとうあせいばつのおりから。此くはんおんの仏力にて。さかぶ（2オ）るきじんをしたがへて。こくどを、さめ給ふとや。今の我身はくはいたいの。をもき身なればねがはくは。やすくへいさんなさしめ給へと。心しづかにくはんねんし。よものけしきを見給ふに。

おもしろや。地しゆのさくらも。先さきてくもかと。見ゆるをと山。たきのしらいと打かすみ。あらしに花のかずちりて。ゆきかと思れば花のはなのふぎよのたかねおろしの。はげしくて。袖にたまらぬおもしろや。うぐひすきなく山のはの松のはごしに見えそむる。あれだうりかな大ぶつの。しやかはやりみだはみちびく。一すぢに。後生ぜんしよと。ふしおがみの。（2ウ）卅三げん。これかとよ。一二のはしに成しかば。こまのあしなみはこばせて。たどろくどと打わたり。むかふに見ゆるいなり山。まだ秋ならぬあをかいで。もみぢのころはかならずと。ふかくちぎりにてゆくすゑは。うづらなくなる。ふかくさ山。かすみのたに、なのみして。松に花さくふちのもりうちこへ。ゆけばいやほと、ぎす。はつねさだかにをとづれて、なをしも。なつをしらせけり。ふしみのさとは夕立て。なる神こはしはた山。ふもとをゆけば水清きかのうち川の。せの鳥々ながむれば。やまぶきのせに花さきて。こがねのきしと夕まぐれ。ヤレ（3オ）あれを見よなにもに。月こそ出れあさひ山みづのみまきのまこもぐさ。おりしりがほに。おひしげりはず。ゑのつゆに風あた。玉をみだせる。ごとく也。たなびくくものやはた山。正八まんをふしおがみ。そもく当社の御神は。げんじるいたい異神たり打こへ。見れば。これやこの。よどのかはせの水車めくるうきよの。ならひかや西寺はいつかあれはて。くさばうくと物すくこのはみだれてつゆしげし。とばに恋づか。秋の山むつだのよはのむしのこききにつけてもあはれなり。東寺よつゝか行月の。かつらのさとを跡に（3ウ）見てたかおの山の。下もみぢ。にしきをいろどる夕時雨。ぬれてやしかのひとりなく。さがの、はらをみなへし。花山の僧正へんぜうの。我おちにきとつらねしもむかしがたりにはや。なりて。みゆきふりにしせり川や。ちよのふる道をとにきくかのうづまさの。かねのこゑ。しゆじやうちやうやのゆめをさます。誠にたへ成れいかな。一むら松はとしへてもときはのさとか。北山やつもるしら雪。ふみわけて。心ほそくもふなをか山の。けふりのすゑもたえく。一しゆはかうぞ聞えける。けふり立。ふなをか山をながむれば。よそのなげきに（4オ）袖ぞぬれけると。打ゑいじ行程にきぶねの明神くらま山。おはらの里にひえいざん。なをしも嵐はげしくて。谷の小川もこほりとち。鳥のこゑさへかすかにて。くれてはかけをおしむ成。ひのをかとうげに。あはた口よしだの宮に。成しかば。やをよろづよの御神をこゝにうつしてやをとめが。袖にすゑふるかぐらをか山又さとをこへすぎていろめく花の都成。雲のはやしのなに聞し。洛外の寺社残りなくおがみめぐらせ給ひつ。なむや。らくやう寺社仏神と。一心に御きせい有やかたに帰らせ給ひける。御子孫はんじやう万々歳。めでたかりける御代の春と治る。国こそ久しけれ（4ウ）

表2 義太夫節大字本の偽板一覧

一、本表は、正規の板元（竹本座は山本九兵衛・山本九右衛門、豊竹座は西沢九左衛門）以外の本屋により刊行された大字本（八行本・七行本）の一覧を目的とする。ただし中字本（九十二行）は除く。
 一、「初演年月」欄は『義太夫年表 近世篇』を基本とするが、『竹本義太夫浄瑠璃正本集』（大学堂書店、一九九五年）に従ったものもある。
 一、「八行本」「七行本」各欄には、奥付の板元名と、その所蔵機関名を掲げた。なお板元名の内、特に京都の本屋については、ゴチック体で示した。
 一、「備考」欄には、その他、特記すべき事柄を記した。

No.	初演年月	作品名	八行本（板元、所在）	七行本（板元、所在）	備考
1	元禄5年5月以前	天智天皇		正本屋仁兵衛板、玉川大学・天理図書館	
2	元禄6年2月以前	せみ丸	正本屋善四郎板、演博・東京芸術大学。 瀬戸物屋伝兵衛板、西尾市岩瀬文庫	正本屋仁兵衛板、演博	七行本は豊竹座再演時の刊行
3	元禄7年7月以前	大磯虎稚物語	山本九兵衛（大坂）板、演博	正本屋仁兵衛板、大倉集古館・大阪大学	
4	元禄11年正月以前	十二段	正本屋善四郎板、大阪大学		
5	元禄11年～末年	那須与市小桜威	正本屋仁兵衛板、神戸女子大学		
6	元禄12年	曾我五人兄弟	正本屋仁兵衛板、東京大学駒場図書館		
7	元禄13年	百日曾我	正本屋仁兵衛板、国会図書館・大阪大学・松竹大谷図書館・天理図書館・東京大学文学部国語研究室		
8	元禄16年5月	曾根崎心中	【A板】 正本屋平兵衛板、演博。本屋平兵衛板、早稲田大学 【B板】 無刊記、天理図書館・東京女子大学・文楽協会		A板は、板心「曾」「廿四」丁本。B板は、板心「そねさき」「廿四終」本
9	宝永2年11月	用明天王職人鑑	本屋仁兵衛板、松竹大谷図書館・東洋文庫・梅花女子大学		
10	宝永3年夏	ひぢりめん卯月紅葉	正本屋仁兵衛板、天理図書館		
11	宝永4年末	心中重井筒	【A板】 山本六兵衛板、宮本瑞夫氏 【B板】 正本屋七兵衛板、天理図書館・東京大学教養学部。 山本九兵衛板、天理図書館		A板は、板外「井三千」丁本。B板の内題は「心中かさね井筒」、実丁数26丁本
12	宝永5年	傾城反魂香	正本屋仁兵衛板、国会図書館・玉川大学		
13	宝永7年4月	心中万年草	山本九兵衛板、京都大学		
14	宝永7年4月以前	枕久末の松山	八文字屋八左衛門板、東京芸術大学		
15	宝永7年5月以前	酒吞童子枕言葉		山本九兵衛板、文楽協会。正本屋喜右衛門板、松竹大谷図書館。谷村清兵衛板、東京芸術大学	
16	宝永7年閏8月	孕常盤		正本屋仁兵衛板、天理図書館	
17	宝永7年	吉野都女楠		正本屋仁兵衛板、天理図書館・東京大学駒場図書館・早稲田大学。作本屋八兵衛板、京都大学	六・七行本
18	宝永7年	碁盤太平記	【A板】 象牙屋三郎兵衛板、早稲田大学。本屋仁兵衛板、尼崎市歴史博物館・大東急記念文庫・文楽協会・三木ガーデン歴史資料館。本屋平兵衛板、松竹大谷図書館 【B板】 谷村清兵衛板、演博・天理図書館。鶴屋喜右衛門板、文楽劇場		A板は、板心「碁」「卅三」丁本。B板は、板心「太」「卅三」丁本

35	享保4年2月	本朝三國志		菱屋治兵衛板、国立文楽劇場。谷村清兵衛板、演博	
34	享保3年11月以前	山椒太夫叟原雀		菱屋治兵衛板、演博	
33	享保3年2月	日本振袖始		山本九兵衛板、玉川大学。菱屋治兵衛板、国立文楽劇場。正 本屋喜右衛門・正本屋七兵衛板、大阪大学・神戸女子大学	
32	享保2年2月	国性爺後日合戦		【A板】山本九兵衛板、演博。 【B板】正本屋仁兵衛板、東京大学駒場図書館	A板は、板外「国後九十九」 丁本。B板は板心「後日」二百 終」丁本
31	正徳5年11月	国性爺合戦		【A板】山本九兵衛板、演博。正本屋喜右衛門板、青山学院 大学日本文学研究室・演博・天理図書館。菱屋治兵衛板、神 戸女子大学。菊屋七郎兵衛板、関西大学・天理図書館 【B板】正本屋仁兵衛板、演博・神津・東京大学教養学部・ 東北大学・梅花女子大学・姫路文学館	A板は、板心「こく」、表ノド 「九十二」丁本。B板は、板心 「国」「九十終」丁本
30	正徳5年4月	曾根崎心中十三年忌	正本屋七兵衛・正本屋喜右衛門板、天理図書館		内題は「曾根崎心中」
29	正徳4年顔見世	梶狩剣本地		菱屋治兵衛板、文楽劇場	
28	正徳4年9月	音曲百枚笹	山本九兵衛・山本九右衛門板、東京都立中央図書館	正本屋仁兵衛板、東京大学教養学部・中之島図書館	
27	正徳4年9月以前	頼光あとめ論	正本屋七兵衛板、演博		
26	正徳4年夏以前	持統天皇歌軍法		正本屋仁兵衛板、淡路人形浄瑠璃資料館（新見文庫）・演博・ 東京大学教養学部	
25	正徳4年正月	天神記		正本屋仁兵衛板、関西大学・演博・東京大学文学部国語研究室	六・七行本
24	正徳2年9月以前	嬬山姥		【A板】山本九兵衛板、神津。菱屋治兵衛板、演博。正本屋 喜右衛門板、演博 【B板】正本屋仁兵衛板、四天王寺国際仏教大学・東京芸術 大学・天理図書館	A板は、板外「山六十九丁」 丁本。B板は、板心「山一」▲ 八十四」丁本
23	正徳2年初春	夕霧阿波鳴渡	山本九兵衛板、檜枝岐村歴史民俗資料館。鱗形屋孫兵衛・ 八文字屋八左衛門板、東京大学文学部国語研究室		
22	正徳元年秋以前	百合若大臣野守鏡	正本屋善四郎板、実践女子大学・松竹大谷図書館	正本屋仁兵衛板、東京芸術大学	
21	正徳元年7月以前	めいどの飛脚		山本九兵衛板、東京都立中央図書館。菱屋治兵衛板、天理図 書館。正本屋喜右衛門板、大東急記念文庫	
20	正徳元年正月以前	曾我扇八景		正本屋仁兵衛板、尼崎市歴史博物館・京都大学文学部・東京 大学文学部国語研究室	
19	宝永7年	心中万年草	山本九兵衛板、京都大学		

表3 南山大學圖書館・逸題道行揃所収曲一覽

	前半	後半
目録	目録 一 十二段長生殿 二 同浄瑠璃御前 三 吉野忠信／若むらさき・花むらさき 四 同女郎名寄 五 自然居士にゐのまへ 六 伊豆日記こうしつ 七 本海道虎石とら 八 天智天皇 九 同はなてる姫 十 せみ丸北のかた 十一 同あふさか山 十二 もり久あけぼの 十三 同ほうしやうがく 十四 同びくに 十五 今様柏木よしつな	四季段 みちゆき さいもん みちゆき みちゆき みち行 び人そろへ みちゆき はし姫まふて みちゆき 馬子歌 みちゆき ちこくのあととき 月見の段
内題	十二段 長生殿 <small>ちやうせいでんのしき</small> 四季 竹本義大夫正本 浄るり御前道行 吉野忠信／わかむらさき・はなむらさき 道行 女郎名よせさいもん 自然居士 にゐのまへ 道行 後室道行 大いその虎道行 天智天皇 びじん揃 はなてる姫みちゆき (表題なし) せみまる道行 盛久あけぼのむまごうた 盛久ほうしやうがく道行 びくに地ごくのあととき よしつな月見のだん	行・丁数 11・2 12・2 10・2 10・2 10・2 10・2 10・2 10・2 8・1 10・2 11・2 11・2 8・2 8・2 8・2
初演年月	筑後掾受領以前 筑後掾受領以前 元禄10年7月以前 元禄10年7月以前 元禄10年7月以前 元禄6年2月以前 元禄7年7月以前 元禄5年3月以前 元禄5年3月以前 元禄6年2月以前 元禄6年2月以前 貞享3年10月以前 貞享3年10月以前 貞享3年10月以前 筑後掾受領以前	「富士の巻狩」 「烏帽子折」 元禄8年4月以前。 元禄3年1月。 元禄9年8月以前 元禄9年8月 元禄7年7月以前 元禄16年5月